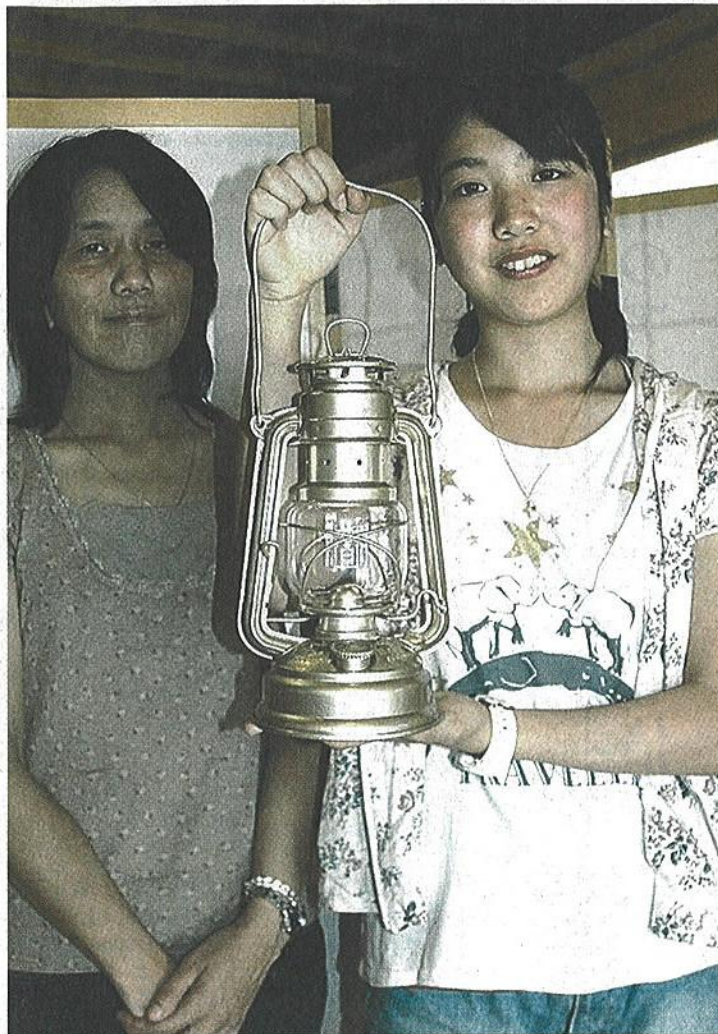




ランプに採火した「原爆の火」と深尾一絵さん、明加さん親子（九度山町の慈尊院・みろく館で）

広島に投下された原爆の残り火をともして、犠牲者の冥福と平和を祈る「キャンドルナイト」が18日、県内で初めて、九度山町の世界遺産・高野山真言宗慈尊院で開催される。「原爆の火」の話を耳にし、平和への思いを新たにしたい同町下古沢、きのくに国際高等専修学校2年、深尾明加さん(16)と母・一絵さん(44)が福岡県から火を持ち帰り、実現した。(曾我一豊)

深尾さん親子 福岡で採火

「原爆の火」に平和誓う

火は、同県八女市星野村出身の山本達雄さん(故人)が、被爆死した叔父の形見として、原爆投下で廃墟となった広島市内でくすぶる火をカイロに入れて持ち帰った。村はこの火を「平和の火」として守り続け、大阪市の「キャンドルナイトワンピース」実行委の呼びかけで、全国各地でキャンドルナイトが行われるようになった。

今年4月下旬、一絵さんはこの話を大阪の友人から聞き、明加さんに話したところ、「私も原爆の悲惨さを学校で学んだ。二度と戦争が起こらないように和歌山でも平和を訴えたい」と決心。同実行委に申し出て、2人が「ピースステーション」となり、各地域のキャンドルナイト主催者を募集、紀の川市と大阪市の計4人から応募があった。深

18日にキャンドルナイト 九度山・慈尊院

尾さん親子は今月初め、星野村に行つて採火し、12日に慈尊院・みろく館で4人に火を分けた。

深尾さんは18日午後7時9分、同院でキャンドルナイトを開催。参加者には竹製の燭台などを配って火を移し、境内に並べたり、噴水の池に浮かべたり、犠牲者の鎮魂を祈り、平和を誓う。

一方、深尾さんから火をもたらした紀の川市の女性の後日、ボランティア仲間とかつらぎ町の山中で、大阪市の男性は音楽仲間とライブハウスで、それぞれキャンドルナイトを開催。あとの2人は自宅で家族と祈りをささげるといふ。

明加さんは「この火はとても怖いし、悲しい。でも、あたたかい。平和を考えるきっかけにしてほしい」と訴え、一絵さんは「原爆の火は、山本さんの目の前で突然、立ち、たまたま持っていたカイロに採火できたと聞いた。その不思議さを思いながら祈りたい」と話した。